



# ふれみあむみにっつ

## 第1集

shiroa

## ◆ プロローグ ◆ ズル休みは素晴らしい？！

---

ズル休みなんて簡単だ。ただ黙って出勤しなければいいんだもの。けど、それがどうして、簡単にはいかない。社会人たるもの、無断欠勤は悪だという観念がそうさせるのか、責任感なのか。やってしまえば簡単なことである。

しかし、どうしてこんなことになってるんだろう？

俺はひたすら逃げている。いつもなら車ですっ飛ばしている通り慣れた道をひたすら走っている。

よかった。どちらかというと、走るのは得意だ。

……いや、そうじゃなくて。

問題は俺を追っかけている変なやつらだ。カエルの着ぐるみの頭を被った変な男と、鉢巻を頭に巻いたスキンヘッドの男。あの二人は何者なんだ？ どうして俺を追う？

そしてその男たちを追っていることを知らせてくれた、自称パンダマンと名乗る男。……、男なのだろうか？ ボイスチェンジャーで歪ませた声だから、女かも知れない。どちらにしろ、変な奴ら。

こんなおかしい状況から俺は今逃げ回っている。どこにいけばいいかも分からないまま。

昨日まではごくごく普通のサラリーマンだった。俺は入社三年目にして新人以下の仕事をすめつきり仕事の出来ない営業マンだ。……事実だが、そう説明すると、なんだか悲しくなってくる。

営業先にはなめられ、いつも値引きさせられる。値引きしてでも仕事をとってこないと、自分の存在意義もなくなってしまうので、本当に必死でとってくる。すると上司に「バカモン！」と一喝される。

「利益すっ飛ばくらい値引きしてどうするんだ！　うちはボランティアや慈善事業じゃねえんだぞ！」

そんな偉そうな上司が私のフォローに客先に電話をかけた時の会話がこちらだ。

「ええ、いつもお世話になっております。いや、今回もうちを使っただけありがとうございます。しかしですねえ、この額でうちが仕事すると、もう、あなただからはっきりいいますよ、原価なんです。うちのバカがちょっと値引きしすぎちゃいまして……、え、ええ、ええ、もちろんそんな、私どもはちゃんとした会社です。嘘は申しません。え、ええ、ええ、こちらで約束させていただいたものですから、もちろん、今回のお仕事はこの額でさせていただきますよ。はい、よろしくお願いたします」

フォローになってねえじゃねえか。

そして悪徳取引先への交渉を覆せなかった上司は腹いせに俺をねちねちと攻めるわけだ。

ああ、仕事が憂鬱だ。

カッコウ良くて、頭がよくて、いつも上司に頼りにされる。

右に困る人あれば、スマートに助言を与え、左に迷える人あれば、地図を持って導いてあげる

。

女子社員にはいつもキャーキャーいわれ、失敗してもいつもほがらかに笑っている。

そういう社会人に私はなりたい。

宮崎賢二？ 宮沢駿？ 誰か似たようなことを言っていた気がするけど。そういう社員になろうと思ってもなれない現実。劣等生である俺には仕事が苦痛で苦痛でしようがない。

ずる休みできたらなあ！

そういつも思っていた。そんな夢が、今日叶った！

って、嬉しくない！

なんなんだこのわけのわかんない状況！ 幸いカエルとハチマキは足が遅いので、捕まらずに逃げおおせてるが、この状況はいつ終わりをつげるのだろうか。

「おっはよ！ どこ行くの？」

珍しく俺に声をかけてきた女の子がいる。ちらりとみると、そこにいたのは麗しのミユウちゃんだ。自転車に乗って俺のスピードに合わせ走っている。

「あ、ミユウちゃんおはよう！ 付き合ってくれる？」

「それは無理」

また振られてしまった。すでに学生時代から会うたびに告白をしていたので、振られるのは百回を軽く越している。これだけ繰り返せば傷心などない。

「連れないなあ、でもミユウちゃんは どうして自転車乗ってるの？ 仕事は？」

「仕事は無いの。それより聞きたいのはあたしの方よ。なんでハヤトは走ってるの？」

どうして俺が走ってるかって？

「そんなの俺が知りたいよ！」

……そんなこといっても誰も答えてくれないんだから。しょうがない、自力で考えよう。とりあえず朝の状況から思い返してみるか。

## ☆ 1 ☆ パンダマンからの電話

---

ジリリリリ、ジリリリリ。俺の携帯電話が鳴っている。二日酔いの重たい頭を持ち上げ、携帯に手を伸ばす。電話番号は非通知。誰からだろう？

「もしもし」

『起きたか』

変な声、瞬間警戒する。なんか変な奴からの電話か。詐欺か？

「あの、切りますね」

『お、おいおい切るな！ 大事な電話だ。お前の命に関わる。早く逃げないと殺し屋がくるぞ』

変な声というより、これはボイスチェンジャーを使った声だと気付いた。よくワイドショーで声を変えて本人と分からなくするやつ、あんな声だ。

しかし、命に関わるとはどういうことだ？ 詐欺にしては変だ。

「あの、俺、眠いんです。後にして下さい」

頭を働かせるにも、もう少し休んでからの方がいい。俺は眠ることにした。が。

『何いってんだ、眠ってる場合じゃないぞ！ 今すぐ動きやすい服に着替えないと、時間がないんだ』

見知らぬ声の主は食い下がる。俺の命を助けてたいから、真剣に言ってくれてるのかな。じゃ、嘘でもないのかな。

「あの、よくわかんないんですけど、ちょっとだけなら話をきいてもいいですよ」

『賢明な判断だ。今からお前のアパートにカエルの格好をした男とはちまきを巻いた男が訪れるだろう』

カエル？ 俺をバカにしてるのか？

「やっぱ切りますね」

『お、おい！ 切るな！ 分かった！ 証明する！ 嘘だと思えば指示に従え、本当だから！

切るなよ！ その前にじゃ玄関のドアを閉めろ。危ないが仕方がない。絶対にドアを開けさせるなよ、危険なヤツらだからな。もうすぐ来るはずだ。来たら静かに魚眼レンズで……』

ピンポ〜ン。呼び鈴が鳴った。なんとなくぼーっとしていた頭が瞬間醒める。俺は即座に玄関のカギを閉めた。部屋が狭いのはこういう時に便利だ。……って、昨夜は鍵開けっぱなしだったのかよ！ びっくりだよ！

「こんにちは〜。お兄さん起きてる〜、いるかーい」

聞いたことのない男の声だ。俺は恐る恐る魚眼レンズで外を覗いてみた。

本当にカエルがいた。

カエルの着ぐるみの頭の部分を被った黒いシングルスーツの変人がドアの前にいる。俺を呼んでいる。その隣には、ウェリントンの黒ぶちのサングラスに、鉢巻を頭に巻いたタコ坊主がいる。白いシャツ、ベージュの腹巻が似合いすぎるほどよく似合っている。

俺は恐る恐る音をたてないようにドアから離れると、ひそひそ声で電話を掛けてきた謎の男へ

告げる。

「まじで?!」

『きたか。ちょっと予想よりはやいな』

謎の男もひそひそ声になった。まあ、あんたはひそひそ声になんなくても聞こえやしないよ、と思ったが、お、ちょっと頭の回転が良くなってきたみたいだ。

「どうすればいいんすか」

『裏の窓から逃げろ。そして走るんだ』

「え、どこにいけばいいんすか」

『そうだなあ、……北北西だ。逃げる時は北北西に向かえば間違いない』

謎の男は確信に満ちた声で言った。俺はその確信の意味が分からなかったが、信頼することにした。

「わかった。ところであなたは誰なんです」

『そうだなあ。まあ、パンダマンとだけ言っておこう。また連絡する。幸運を祈る』

そう言って謎の男、パンダマンは電話を切った。俺は着替えようと思ったが、幸いにも昨日からきっぱなしのスーツ姿だったので、そのまま逃げることにした。

って、ここ二階だよ！

玄関で俺を呼ぶ声が大きくなってきた。やばい、強行突破で侵入されるかも?! そう思った矢先、ドンドンとドアを乱暴に叩く音が響いた。続いてがちゃがちゃとドアノブをいじる音が。

直観的にやばいと思った。俺はそっと靴をとり、財布と鍵を持つとベランダに出た。ベランダで靴を履き、下をみた。確かに、飛び降りて降りられなくはなさそうだ。裏は空き地になっており、雑草が軽く生えた地面。アスファルトやコンクリートで舗装されているわけではない。

体力的にはそれなりに自信もあった。俺は勇気を振り絞り、ベランダから飛び降りた。

やればできるものである。衝撃は強く、足腰のばねで吸収しきれなかった衝撃を腕で分散したので、ちょっと手首に痛みが走ったが、これくらいならばしばらくすればすぐ楽になりそうだった。足もそんなにじーんときたわけではない。すぐに走れる。

俺が北北西を目指して駆けだした時、後ろから声がした。

「お、あいつだ！ 逃げたぞ！」

どうやら玄関で粘っても出てこないの、裏に回り込もうとしたらしい。間一髪だ。俺はわけもわからないままパンダマンに感謝した。

……というのが今朝の出来ごと。そこから俺はひたすら逃げているわけだが。やはり分からない。何が起きているんだ？

「そのパンダマンからの電話って何時くらいにかかってきたの？」

話を聞いたミユウちゃんが聞いてきた。

「ええと、ちらっと目覚ましを見たんだよな。確か八時過ぎだったと思う」

「ふーん。じゃ、今日が普通の日だったらハヤトは遅刻してたね」

確かにそうだ。それは俺の悪い癖。飲み過ぎた翌日の遅刻率は今のところは八割という素晴らしい記録を打ち立てている。遅刻は社会人としては恥だ！ とか、社会人失格だ！ とか言われるが、遅刻常習犯ともなると、割と平気なもので、会社からすでにお咎めもなくなった。またか、くらいなものである。

……、ピンと来た！

「ナイスだよミユウちゃん。そこにヒントがあるかも！」

今朝いきなりわけの判らない状態になってたわけだが、その原因がもしかしたら昨夜にあるのかも知れない。酒が入ってイマイチ朝までの経緯が思い出せないが、可能な限り思い出してみよう。もしかしたら何か手掛かりがあるかも知れない。

## ☆ 2 ☆ 昨夜のことを思い出す

利益がふっとぶくらい値引きして仕事を受けた俺に対し、憤った上司はストレス解消も兼ね、俺を飲みに誘った。いや、誘ったというよりは拉致された。俺は用事はないけど「用事があるので今日は」と遠慮したのだ。しかし、上司は俺の腕をつかみ、二の腕をぐいっとつまんで、「上司と呑むのも仕事のうちだろ！ 常識をわきまえろ」と、とてもありがたい社会人のマナーを教えてくれた。と言えども聞こえがいいが、完全に脅しだ。有無をいわさず、「いつもの店でな」といって上司は会社を後にしたわけだが、もしすっぽかしてもしたら、明日何をされるかわからない。俺は自由意志という名の強制のもと、いつもの呑み屋に行かざるを得なかった。

遠慮なく先に一杯やっていた上司は、俺が着く時にはすでに顔を真っ赤にしていた。俺が席に座ると、注文をとる前からいきなりくどくどと説教をし始めた。

俺には特殊な能力がある。聞きたくない話は、完全に聞き流すという能力だ。自動相槌機能と言ってもいい。怒られている間、俺の思考は停止する。そして、聞いてないのを悟られぬよう、俺の反射神経は絶妙なタイミングで「はあ」とか「なるほど」とか「そうですねえ」とか「さすがです」とか「わかりました」とか適当な相槌を打つ。

その間俺は脳の中ではアニメが放送されている。子供のころに見たアニメのシーンがダイジェストで流れ、怒られている間でも、結構楽しい時間を過ごすことができるのだ。

過去、俺は親に最長五時間説教されたことがある。日常的に怒られることが多かった俺は、自然とそんな能力を身につけていったようだ。

人間の防衛本能とは凄い。

そんなわけで、何をどう注意されたのか記憶にない。気がついた時には言いたい事をいい終わり、気持ちよくなった上司は俺の肩を叩き、「だから頑張れ！」と励ましてくれていた。何がどうで「だから」なのか判らなかつたが、要約を求めるとまた話が初めからになってしまいそうなので、「わかりました！ ありがとうございます！」と体育会系のノリで応じた。

自動相槌機能の弱点は、その時食べたものもイマイチ記憶にないことだ。気が付いたらどうやら生中を二杯呑んでおり、料理もモツ煮と鮎を食べていたらしい。

ああ、久しぶりの鮎なのに、ゆっくり味わいたかった。

「よし、じゃ俺は帰るけど授業料でこの払いは頼んだぞ」

そう言って（鬼）上司はさっさと口笛を吹きながら帰っていった。

俺の記憶が正しければ、その口笛のメロディは『まんが日本昔話』の『人間っていいな』という曲である。

確かに、この後輩いびりはとても人間とは思えない。早く人間になってくれ！

そうだ、この時俺は上司のことをこれから妖怪人間と呼ぶことにしようって決めたんだ。

……どうだろう？ 何かカエルやハチマキに結びつく点はあっただろうか？ もしや自動相槌機能発動中に何かがあったのか？ ならば上司の方にも何かが起こっている可能性がある。不本意だがあいつに電話してみるか。

俺はなるべく物陰に隠れるようにして、携帯電話を準備した。

「どうしたの、急に停まったりして」

「ミユウちゃんはちょっと待ってて。もしかしたら追われている手掛かりになりそうなことが分かるかも知れない。やつらに追い付かれてもばれないように、ミユウちゃんはちょっと離れてて、すぐに済むから」

俺は呼吸を整えながらミユウちゃんに告げた。時計をみると九時二十分。上司はコーヒーを飲みながら今日の暇つぶしにどこのエロサイトを見ようか考えている時間帯だ。お楽しみのところ申し訳ないが、こちらも一刻を争う。俺は上司の携帯に電話を掛けてみた。

上司の携帯電話のコール音は若者にはやっているちよびっ子セブンの歌が流れる。まったく、いい年して恥ずかしくないのか、と思っていたらつながった。

「おい遅刻をするならもっと早く連絡するのが礼儀だろ！」

怒っている。

「す、すみません。ちょっとトラブルがありまして。ちょっとお尋ねしたい事があるんですが、昨日の呑みの後、カエルとかハチマキとか見ませんでした？」

開口一番怒られ、気持ちが動揺してしまったのもあり、わけのわからないことを言ってしまった。

「ハチマキ？ 何バカなこと言ってんだ」

「いや、ちがうくて、その、カエルの格好をした、いや、着ぐるみを着た人、人です」

「漫画に出てくるような、ハチマキマンってか？ バカ野郎！ 寝ぼけてねえでさっさときやがれ！」

上司は一方的に電話を切った。まあ、わけがわからないのが当たり前だ。もしなにか心当たりがあれば、言葉に動揺が見えたはずだ。

なにせ、常識はずれのことだもの。

ズル休みになったと思っていたが、上司と電話するとなんだか仕事しないといけない気がしてきた。そう思うとずしっと胸の奥が重くなった気がする。

そんな落ち込みムードな俺を見て、ミユウちゃんは心配そうな顔で見つめていた。

「はあ、俺遅刻してもいいから会社いこつかな」

「無理よ」

「なんで」

「服」

そう言ってミユウちゃんは私の胸元を指さした。

「へ、幸いスーツだよ。三十六時間くらいスーツは連続着したって平気なんだから」



あまり大きな声では言えないが、最長五十八時間連続着したことがある。あ、その時はきちんと途中お風呂にも入ったし、下着も交換したよ。念のため。

「いや、そうじゃなくて」

ミユウちゃんが次の句を継ごうとした時、なんとなく嫌な気配がした。

「までえ〜！」

角を曲がったところでこちらに気付いたカエルとハチマキが俺たちに向かって猛突進してくる。

「やべ、逃げよ！」

俺はすぐに駆けだした。ミユウちゃんも慌ててついてくる。

幸いカエルとハチマキはここにたどり着くまでにかなりの体力を消耗していたとみえ、猛突進といっても顔だけで体はおいついていない。

「追われてるのは俺なんだから、ミユウちゃんはどこか避難した方がいいよ」

ミユウちゃんは軽やかに自転車をこぎながら「そうもいかないのよ、伝えなきゃいけないことがあるから」と言った。

なんとなくドキッとした。先ほど振られたばかりだけど、それは自分から気持ちを伝えたかったってことなのかもしれない。

「お、俺はいつでもウェルカムだぜ。好きなら好きって、ほら、どんと言ってくれよ」

ミユウちゃんは細い目をして、実に冷たく俺を見下した。

「いまはそういう冗談言ってる場合じゃないんだからさ。何か思い出さないワケ、この追われている状況。今はそれをはっきりさせるのが先！」

それもそうだ。先ほどの電話で上司はまったく関係ないことが判った。つまり、二人で居酒屋で飲み、別れた後に何かがあったのだ。あの後どうしたんだっけ？